
ホラー・ホラー・ホラー

章久

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ホラー・ホラー・ホラー

【Nコード】

N8293V

【作者名】

章久

【あらすじ】

今までの人生の中で、一度は怖い思いをしたことがあるでしょう。それは幽霊？ ただの臆病者の思いすこし？

不可解な出来事の体験談を、短編集として纏めてみました。

これはホラー？

それとも、コメディ？

その判断は、お任せいたします。

シヨート・シヨートとして、第5話まで掲載しました。
反響があれば続きを。

この作品は、重複掲載作品です。

（前書き）

ショート・ショート・ショートの「ホラー編」です。

体験談をもとに書かれていますので、ホラー小説のような恐怖感はないと思いますが、現実には体験したことだけに、ちよつと背筋が寒くなる内容になっています。

〱第1話 光る眼〱

息苦しさ、目を覚まそうとした。

寝返りを打って、体を楽にさせようとした。

ところが・・・

からだが動かない。腕も、頭も、足も、どこもかしこも動かなかった。

それどころか、金縛りに合ったように体が硬直している。

心なしか、息も苦しい。目も開けられないようだ。

これは夢なんだ。疲れているだけなんだ。

自分にそう言い聞かせて、無理矢理頭を振って目覚めようとしたが、一向に体が言うことを利かなかった。

焦った。もがいた。しかし、相変わらず体はピクリとしなかった。

いったいどうしたんだ？

背中に汗が滲んでくるのがわかった。

精一杯の力を振り絞って、うつすらと目を開けようと瞼に力を入れてみた。

なんとか、ゆっくりと視界が、おぼろげながら自分の部屋を映し出していく。

とその時、私は心臓が凍りつくのを感じ取った。
背筋に寒いものが走る。

体中の毛穴がいつぱんに開いたような感じがした。

真っ暗な部屋の中で、すぐ目の前で、ふたつの目が光って私を睨みつけていた。

じっと動かない鋭い光。

すぐ目の前に、私に突き刺すような鋭い光が、闇の中から、じっと見据えている。

動かない。ただ私を斜め上から見つめているのだ。

青白い光だ。何の感情もない、刺すような光。

ぞっとした。

金縛りの原因がこれであることは間違いないと確信した。

力いっぱい左腕を動かそうと、力を入れてみた。

動かない。

光は、鋭さを増したように、そしてほんの少し近づいてきたように思えた。

殺されるかもしれない。

ふと、根拠も理由もなく、そんなことが頭に浮かんだ。

私は叫ぼうにも声が出せず、左手を大きく振るように、その光を押し退けようとしていた。

ふっと、全身の力が抜けて、解き放たれた風船のように、体が宙に舞ったような感覚が押し寄せた。

しっかりと瞼が開き、体が動くようになった。

大きく振ろうとしていた左腕は、体を覆っているタオルケットの中に仕舞われている。

鋭い光は、それでも私を睨みつけていた。

私は、タオルケットの中から腕を出して、見つめる光った眼を排除しようとして、宙に向かって腕を振った。

そのとき、完全に正気に戻った。

目を凝らして、光の原因を探す。

暗闇に目が慣れてくると、ふたつの鋭い光は、テレビとビデオの主電源の光だということがわかった。

真つ暗な部屋の中で寝ていた私は、たったふたつの小さな光を、鋭い眼だと勘違いしたようだった。

金縛りも、もう解かれている。

ホッと安堵の息を吐く。

疲れているのか・・・

びつしりと汗を掻いていた。

安心したのか、そのまま疲れ果てた雑巾のように、私は深い眠りについていった。

翌朝、5時30分の目覚ましとともに、私は目覚め、起き上がった。テレビのリモコンを手に取り、そつと電源をONさせた。つかない・・・

私は、疑問に思いながら、テレビに近づいてみた。

テレビもビデオも主電源が切られていることに初めて気づいた。

そういえば・・・

節電のために、午前1時になると、テレビとビデオの主電源が切れるように、タイマーを設定してあったのを思い出した。

では、あの光は、いつたい・・・？

〳〳第2話 闇からの警告〳〳

闇の中に濃霧が溶け込んで、冷たく静かに時間が流れていた。深い靄が、体を、過去を、そして人間の感情を全て包み込んで消してしまったように、私は無気力に佇んでいた。

午後8時40分。長い会議が終わって、軽井沢事業所を出た私は、小さく体を震わせて、軽井沢駅に向かってゆっくりと歩き出した。

街は静かだった。人の姿も、車も、そして人の息遣いも感じられない、ゴーストタウンのような空間が、私を包んでいた。

2月の相当寒い季節に来たときよりも、寒く、侘しく感じられた。私は改めて腕時計を見つめた。

午後8時45分。確かに午後9時前だった。

6月の下旬でも、軽井沢の夜は寒い。

今日の昼間は雲っていた。だが、寒くはなかった。

今は、東京とは格段に違って気温が低かった。

そして、人影もなく、駅前の商店さえ、既に閉店していた。

ネオンも、客引きも、そこには存在しない。

軽井沢の東側、通称「旧軽井沢」と呼ばれる側である。

会議のあと、ある幹部社員から「今日は久しぶりに飲みましょうね」と誘われたが、それを固辞して東京に帰る決心をして駅まで歩いてきた。

今日は軽井沢で、久しぶりに営業幹部と酒を飲み、営業の愚痴でもじっくりと聞いてやるつもりだった。

だが、明日の朝9時からの重要な打ち合わせを行うと連絡が入り、それが全ての予定を吹っ飛ばしたのである。

私は軽井沢駅に、若干足を速めた。

今からだと、20時55分の東京行き新幹線あさまに間に合うはずだ。

それでも、東京に到着するのは、22時20分である。自宅に帰り着くのは、きつと午前零時を廻るだろう。

滞在時間3時間30分の軽井沢出張だが、今の私の仕事量から考えると珍しいことではなかった。

私は、旧軽井沢の人がひとりもない街の中を、靄に包まれながら、駅に向かって歩いていった。

人が果たして住んでいるのか、と思うほど、人の気配を感じなかった。

と、ふと足を止めて、私は振り返った。

静まり返った靄の中で、何かを聞いたような気がした。

私は、駅前の交差点をぐるりと見回した。

猫一匹歩いてない街・・・深い靄が、自分の喜びも、悲しみも、切なさも、苦しさも、すべて飲み込んでしまったように、虚ろで、乾いたもののように感じられた。

私は、自分の耳が気のせいだったことを認めるかのように、目の前の駅舎にむかって歩き出そうとした途端、今度ははっきりとわかる声が私の耳に突き刺さった。

きやあああ・・・

女性の悲鳴である。それも近い。

確かに女性の悲鳴だった。

私は俄かに色めきたって、声のした方向を探そうとキョロキョロした。

悲鳴は一度だけ。

どこからだ？ いったいどこから・・・

そのとき、私の鼓膜を突き破るような悲鳴が背後で聞こえた。

ハッとして振り返る。そして、暗闇の中を目を凝らして、悲鳴の先

を見つめた。

体が硬直しているのがわかった。

軽井沢の闇は、女性の悲鳴によって、今日覚めようとしていた。

――第3話　夢・・・だったのか――

私が24、5歳の頃。

仕事はコンピュータ会社の経理担当。丁度、時期は8月頃で、お盆休みだというのに、下期の予算編成業務で、結構忙しい毎日を送っていた。

会社は当時、横浜の桜木町に位置し、8階建てのビルに独占的にテナントとして入居していた。

ソフト開発の会社だけに、徹夜組の社員も少なくなく、夜中でも煌々と電気が付いているような会社だった。

私が働くフロアは3階で、約70平米の広さに、総務部総務課、人事課、業務課、経理課、それに営業部営業1課、2課、販売課が同居している。

午後10時を廻り、流石にフロアにはほかの社員が退社して誰もいなくなつた。フロアにたった一人は慣れたもので、特に淋しさも、孤独さも感じることなく、各部署から提出された予算表とにらめっこしていたと思う。

午前1時を過ぎた頃、連日の疲れからか、睡魔が襲ってきたので、仮眠を取ることにした。

フロアの隅に設置している応接室のソファで少し眠ることにした。

応接室は、窓のない12、3平米の狭いフロアに、応接セットが置かれていただけの部屋だ。フロアは電気をつけて、応接室を真っ暗にして、長いソファに横になったのは午前2時前だった。しばらく横になっていた。

応接室のドアの隙間から差し込むフロアの電気が気になった。体が疲れているわりには目が冴えて、すぐには眠れなかった。

ようやくウトウトしかけたとき、いきなり応接室のドアが開かれて、ドアの入り口に誰かが立った。

急に差し込んできた光に、ちよつと眩しい思いで右手で顔を覆った。

誰だろう、こんな時間に・・・

徹夜していた人がいたのか・・・

そんなことをおぼろげに感じながら、それでもソファに横になっていた。

すると、ドアの入り口に立っていた人が、いきなり応接室の中に入ってきた。

彼は、いや近くにきてようやく男だとわかったのだが、彼は、私の傍まで来て顔を覗き込むと、何を思ったのか、いきなり私の足を？んで引っ張り出したのだ。

ど、どうということなんだ・・・

だが、私は金縛りに合ったかのように体が硬直して動かなかった。男の為すがままに、私は両足を引っ張られて、応接室からフロアに引っ張り出されようとしていた。

床を引き摺りだされる感触が、後頭部や背中に感じながら、私は応接室から引つ張り出された。
フロアの眩しい光が、右手で覆われた瞳の中に被さるように入ってきた。

眩しい・・・

私は目を見開いて、両足を引つ張る男を見ようと目を開けた。
なにをするんだ！ と怒鳴ってやるつもりだった

目を見開くと、そこは応接室の中、閉まったドアからフロアの光が漏れていた。

眠ったときと同じ光景が目に入ってきたのだ。

夢・・・？

夢だった。やはり疲れていたのだ。疲労で、嫌な夢を見ていたのだろう。

それにしてもリアルな夢だった。

私はソファから起き上がり、汗でびっしょりになったワイシャツを気にしながら、ソファから下りて応接室の電気をつけようとした。

えっ・・・・・・・・

確かにソファに横になる前に、ソファの下に揃えておいた自分の革靴が、ひっくり返って乱れていた。

壁のスイッチを押して電気をつけると、床に、確かに何かを引き摺

った痕跡が、私の汗と思われる湿り気とともに、くつきりついていたのである。

くく第4話 見ないほうがいいよく

会社のセミナーをサボって、渋谷のネットカフェで映画を見ることにした。

平日の昼間だけに、渋谷といえども静かだ。

3時間ほどサボれる。

私は、まず1本目としてアクション映画を堪能した。

余韻を残したまま次の映画に移る。

次の映画のタイトルは「奇談」

阿部寛さん主演の、ホラーとは言えない何とも言えない映画だが、何故か吸い寄せられた。

DVDが始まると、今までちょっと暑いと思っていた個室内がひんやりし始めた。

気のせいだろう。

小さな個室の中に、なんだか異様な気配を感じて、ちょっと背筋が寒くなった。

ホラーではないのに、意外と気が小さい自分に苦笑した。

画面に集中しようとした瞬間に、私の横を白い煙のようなものが、ふうふうと横切ったのを感じた。

ん？

個室である。

誰かがいるわけもなく、気のせいだと画面に向かうと、また白い影

がふうくと横切る。

それでも気のせいだと無視して、画面を観ていると、耳元に、そつと……

「見ないほうがいいよ」

と小声で囁く女性の声がした。

ぎよつとして振り返ったが、勿論誰かがいるわけでもない。

両隣のボックスは無人。正面もさつきから音がしないので無人だろう。

いったい誰が……

それでも画面を止めずにいたら、

「見ないほうがいいってっば」

とはつきりと私に向かって囁いたのだ。今度は正面の上のほうだった。

私が顔を上に向けると、そこには……

あっ!!

顔を上げるとそこには……

真っ白い

時計。

会社に戻る時間を示していた。

慌てて帰り支度を始める。

危なかった、このまま映画を最後まで観ていたら、会社に戻る時間が大幅に遅れて、きつとその理由を追求されるだろう。

止めてくれた声に感謝だ。

だが……

それにしても、あの囁き声は誰だったのだろうか。

〳〵第5話 26時20分の出来事〳〵

私の働いているオフィスは、コンクリート打ちっぱなしの6階建てのビル。そのほとんどをテナントとして賃借している。

私が普段いるフロアは4階だが、何しろ部署を一つ任されている部長職だから、私の部下は、4階と6階と、別のビルの4階に分散していて、結構大変だったりする。

この日、私は6階フロアでファイルと格闘しながら調べ物をしていた。

時間は、26時20分（午前2時20分）を廻ったところ。

既に仕事の量から徹夜は覚悟していたので、特に焦ることもなく、一人静かに調べ物に没頭できていた。

6階は、30?を二つに区切り、片方を社長室（但しガラス張りなので中はくっきりと見える）、残りを人事グループと秘書グループで使用している。

私はどちらのグループの責任者でもあり、6階にはたびたび足を運ぶが、こうして6階で仕事をすることは滅多になかった。

「この建物は、出るって噂ですよ」

いやあ、どこのオフィスでも、最新のテクノロジーを駆使したハイテクビルじゃない限り、そんな噂は付きまとうものではある。そんなことを気にしていたら、徹夜どころか残業すらできなくなってしまう。

私は、幽霊を信じないことはないが、目に見えるもの以外は、目を瞑ることにしている。

ふと、6階でエレベーターが止まった気がした。

ん・・・？ まだ働いている社員がいたのか・・・？

20mほど離れた別ビルに事業部があり、そこには150名ほどの社員が必死に働いている。徹夜をしている社員も少なくない。

こっちのビルの6階に灯りが見えて、社長が戻ってきたと勘違いして打ち合わせを申し込む幹部社員も、実は少なくないのだ。

社長じゃないと知ったら、がっかりするに違いない。

但し、深夜の午後11時を過ぎると、エレベーター自体が、専用のセキュリティカードがないと動かない仕組みになっている。そして、そのカードは社員全員が持っているわけではなかった。

いや、社長が接待や出張から戻ってきたのかもしれない。社長は2

4時間体制で仕事をするバイタリティ溢れる人だから。

一瞬、そんなことを考えながら、静まり返ったフロアで耳をすませた。

誰もエレベーターホールからこちらに来る人はいなかった。
空耳か。

私は、また気にも留めずにファイルに目を落とした、その瞬間に、一人の男性がふっと目に飛び込んできた。

物凄い驚きに、一瞬心臓が止まるかと思ったが、彼は、私に見向きもしないで、静かな足取りでフロア内に入ってきた。

年齢は20代後半、髪は少し長く、横じまのポロシャツにジーンズ、そしてスニーカーを履いている。

うちの社員に多いスタイルである。

「お疲れ様です。随分遅くまで頑張りますね」

私はにこやかに声をかける。顔に見覚えがないが、そんなことはよくあることで、300名近くも社員がいると、入社3ヶ月半の私では、顔と名前が一致しない社員がいてもおかしくないのだ。

しかも、相手は私のことをよく知っている。何しろ、管理部門の部長だから、私は面が割れている。

私の挨拶にも返答をよこさないで、正面を見ながら彼は私の前を通り、その先にある非常階段のドアを開けて消えていった。

なんだあ???

一瞬の出来事で、引き止めることも、呼び止めることもできないまま、私はあんぐりと口を開けて、それを見守っていた。

まあ、300人も社員がいれば、一人くらい私を気に入らない社員がいてもおかしくはない。

その後私は目的のデータを集めて、午前4時前に自席の4階に戻り仕事を続けたのだが、彼の不可解な行動が読み取れず、しかもその社員の名前が思い出せないの、翌日、6階の情報通と呼ばれている秘書のところに行つて、昨夜の経緯を話して聞かせた。

彼女は、私の話を聞いてるうちに、徐々に怯える表情になり、

「見ました？ ついに見たんですね？」

そう繰り返した。

どういうこと？ と私が問い詰めると、

数年前に、まだ当社がこのビルを賃借する前の話なのだが、一人の青年が、このビルの6階の非常階段から屋上に上がり、飛び降り自殺をしたらしい、と秘書が恐々と話した。

そんな噂が、当社が入居したのちに広まった。彼を見た人も少なくとも、その時間は決まって26時20分だったという。

【終】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8293v/>

ホラー・ホラー・ホラー

2011年10月9日13時03分発行